# 私が携わったシステム開発プロジェクトについて

## プロジェクトの特徴

損害保険会社Ａ社はインターネットでの自動車保険や傷害保険などを販売している。市場のがんや先進医療に対する補償のニーズにこたえるため、このたび医療保険に新たに商品を増やすことになった。その際に今後の市場のニーズに迅速に対応できるように、汎用機で構築された現行の医療保険向けシステムを、オープン系のＷｅｂシステムとして再構築することとなった。再構築にあたっては、保険業界で採用事例の多いパッケージソフトを活用することとなった。当医療保険再構築プロジェクトを情報システム開発会社であるＢ社が受注し、私がプロジェクトマネージャに任命された。

## 見積りのために入手した情報と工数を見積もった時期

パッケージソフトを利用することが前提条件となっていたため、まずはパッケージソフト開発会社に、見積りのための基準となる生産性指標および開発標準を依頼し、入手した。見積りを行った時期はプロジェクト計画の時期である。

# 工数の見積りについて

## どのように工数を見積もったか

後述の①②の両面で見積りを実施し、両見積りの結果が近い値となるまで繰り返し実施した。その後で、プロジェクトの品質目標及び要員のスキルを加味した調整を行った。

1. 適用するパッケージのカスタマイズ開発の規模と、事前に入手した各開発工程ごとの単位規模における生産性指標から、トップダウンで工数を見積もった。
2. ＷＢＳの各アクティビティをベースにボトムアップで工数を見積もった。見積りには３人のメンバを選定し、各自見積りを実施するように指示した。そして得られた３つの見積り結果の平均値を主に採用した。

## 見積りを正確に行うために工夫したこと

開発範囲から標準的な開発内容を選定し、見積りのシミュレーションの一環として先行して実際の開発を行い、想定した工数内で実施可能かを検証した。この結果と机上で見積りした結果の差異を分析し、工数の調整を行った。

３人のメンバに見積りを依頼し、３人の結果が近ければ問題ないが、１人だけ工数が大きかったり、逆に少なかった場合はなぜそのように考えたかをヒアリングを行い、その内容を他の２人へフィードバックし、再度見積りを依頼することで、３人の認識の水準を均等にする工夫を行った。

# 工数のコントロールについて

## 見積りどおりに工数をコントロールするためのプロジェクト運営面での施策

パッケージ開発会社から専門の開発標準を入手し、それに自社の開発標準をあわせ、プロジェクトの開発標準として整備した。また見積り時に工数のシミュレーションとして先行して開発したものを、実装サンプル（実際に動作する開発標準）として整備し、ドキュメントの開発標準だけでは理解しにくい箇所を補完できるように工夫した。

また体制面の工夫として、ＰＭＯに開発工数管理専門の担当者を任命し、開発工数の実績値を日次で収集・分析させ、見積り時に採用した標準工数と乖離がないか日々確認するように指示した。

## プロジェクト運営面での施策の実施状況、評価、発見した問題及び対策

ＰＭＯによる日々の工数チェックの結果、一部のメンバの生産性の低下が見つかった。原因を分析してみると、開発標準を一部逸脱した設計が行われていることが判明した。そのため、担当の設計者には、設計の見直しを指示し改善するように努めた。また同様の問題が再発しないよう、開発標準の勉強会をひらき、再度開発標準の徹底を行った。

以上